

## 生死をこえてキリスト

先週に続いて「わたしにとって、生きるとはキリストを生きること」というパウロの言葉に聴いてゆきます。今日は、その中間部分、全体をみつつに分けたなかの一番中心のところを取り上げます。この手紙はパウロが福音宣教の結果、捕らえられ、さぞ意気消沈しているであろうとフィリピの信徒たちは心配したことでしょうが、案に相違して獄中から届いたパウロの手紙は、この事態も福音宣教の前進に役立ち、わたしは喜んでいるという思いがけないものでした。そして、どうしてわたしは喜んでいるかという理由を説き明かしてゆく部分を今朝はご一緒に読みました。その結論とも言うべきパウロの根っこにある確信を言い表すと「わたしにとって生きるとはキリストであり、死ぬことは利益」という宣言となるのです。伝道者パウロの覚悟と言いますか、とても強い言葉です。ひとりの信仰者としてこのパウロの言葉に接する時に、自分を顧みて「わたしにとって生きるとはキリストを生きること」という境地にあるか、そこを目指して生きているかが問われるように思います。これは個人的な感想なのですが、わたしは仕事を辞めて、神学校に行きたいと母親に話した時に「御言葉を宣べ伝えずんば已まず」という心構えがあるかと問われたことを、この個所から思い出させられました。パウロのこの断言は力強いものですが、しかしわたしは、この言葉はパウロの中から生まれて来たというよりも、いままでパウロが導かれてきたことを適切に言い表したに過ぎないのではないかと考えます。つまり主役はパウロではないのです。いま彼は獄中に囚われていて、それはみずからの終わりを意識せざるを得ない状態です。実際に最後が近い。そのときに彼は自分の歩みを振り返ったでしょう。考える時間は

たっぷりある。そして、自分の歩みを総括した時に出た言葉が「わたしにとって生きるとはキリストであり、死ぬことも益」だということに落ち着いたのです。この手紙よりも前に書かれたと考えられるガラテヤの信徒への手紙にも「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身をささげられた神の子に対する信仰によるものです」（2章 20節）という言葉がありますので、このフィリピの信徒への手紙に記された言葉も思い付きというようなことではなくて、神の召しに対する応答、御言葉となられたキリスト・イエスにどのように応答するかをいつも考えてパウロが生きていたことを証するものです。そのうえで興味深いのは 19 節以下に記されているように、パウロが自分自身の方でこのように生きているのではなく、自分はフィリピの信徒たちの祈りに生かされ、イエス・キリストの霊の助けによって守られていると認識していることです。祈りと霊の助けによって、見えないものに目を注いでいる。それが牢獄の中にながら別の角度で自分の歩みを、また現状を、そしてこれからの望みを見ることを可能にしている。信仰による見識とでもいったらよいのでしょうか。そしてそれが出来たのは自分から祈ることも勿論、大切ですが、祈られていることを知っているということが実は非常に大きなことなのです。これはどれほど強調してもしすぎることはない。窮地に落ちているときはのびやかに祈ることは難しいものです。他者の祈りの声を必要とする。自分の中のキリストは、兄弟姉妹の中のキリストよりも弱いと言った人がいますが、言い当てていますね。伝道者のはしくれとして痛感するのは、わたしたちが牧師としての働きを続けるために祈っていて下さる方を思い浮かべることが出来ることが

本当に有り難いということです。祈られない伝道者というのは筋斗雲のない孫悟空みたいなもので、本来の力を発揮することが出来ないものです。自分でなんとかしようとする袋小路に入ってしまうのです。祈りは人にではなく、神に向かうものですから、パウロがフィリピの信徒たちのことを執り成して祈っているように、わたしたちをキリスト・イエスにおいて結び付けて下さった神が互いの祈りを聴き上げ、働いて下さる。そのことが「あなたがたの祈りとイエス・キリストの霊の助けとによって」という言葉で言い表されているのです。これは教会の交わりを守り、前進させてゆく大切な秘密ですね。互いに祈りに覚えることは血液の循環のように教会という霊的な体の健やかさを保つのです。そうしてこそ初めて、ここでパウロが宣べたような、「これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるように切に願い、希望しています。わたしにとって生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです」という発言が生まれたのです。祈りの支えとキリストの霊の助けなしにこのような発言を生きることは出来ません。ここは間違えないようにしたいですね。この発言だけを切り取って聴きますと、パウロはなんて自信家なんだろうと思う人もいるかもしれません。しかし、そうではない。いまも申し上げたようにパウロは、信徒たちの祈りとキリスト・イエスの霊の働きによって、自分が生きているのではなくて、生かされていること、守られていることを知っています。さらに、死ぬことによってこの牢屋での様々な肉体の苦痛や不安から解き放たれ、愛するイエスの許に行くことが自分にとって望ましいけれども、生かされることによって地上でなお果たすことの出来る働きがあることも理解しています。そして、板挟みになって、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません、と

正直に告白をしています。今回、わたしが一番教えられたのはこの個所でした。強い意志をもつパウロですが、これからのことを自分の意志に任せていないのです。状況は判断する、こうしたいという希望もする、しかし、そこに「主が許されるならば」という保留をつけることを彼は決して忘れないのです。ここが「生きるも死ぬもキリスト」に委ねるという、信仰者パウロの大切な覚悟だと思います。そして、このことはもう少し踏み込んで言い換えますと、「わたしには命よりも大切なものがある」ということではないでしょうか。自分の命よりも大切なものがある。それがイエス・キリストの福音であるとパウロは信仰によって理解させて頂いているのです。思えば、わたしたちの社会は、命が一番大切だと教えています。ひとりの命は地球よりも重い、そういう表現も耳にします。ちょうど木曜日が建国記念日でしたが、わたしたちキリスト者はこの日を信教の自由を覚える日として守ります。それは戦前の日本が天皇を中心とした疑似宗教国家であり、神社を参拝させ、教育勅語を作り、戦争になると天皇のために死ぬこと、お国のために死ぬことを名誉として利用してきた。この路線に従わない者たちを非国民という形で排除してきた。そういう戦前の教育に対する反省から、戦後日本の教育は人権を重んじ、命の大切さを説いてきた。そのこと自体は間違っていない。わたしたちは仕えさせようとする者の欺瞞や偽善を見抜かねばなりません。自分の繁栄や利益のために、他者の命を盾にしたり、犠牲にしたりする者を警戒しなければならない。そのことをよく理解したうえで、しかし、わたしは、命よりも大切なものがある、という真理にも耳を傾けなければならないと思うのです。誤解を恐れずに言えば、自分の命に固執するそのあり方は一步間違えると世界を破壊します。福音のため、わたしのため命を捨てる者はかえって

それを得るのである。とキリストは言われました。パウロはいま自分の命よりもキリストが尊い。それは全ての者を生かすことの出来る泉だからです。だから、生きて苦痛を忍びながら伝道の働きを担うことも良し、死んで苦痛から解放されて主の御許に行くのも有り難し、そういう覚悟に至っている。パウロは福音と出会って、キリスト・イエスの十字架の死を知って、自分の命の捨て所を知った。キリストの十字架に従って、自分の命を置けばよいのだという信仰の知恵を獲得した。キリストに結ばれた命こそが永遠であり、朽ちないものだという事を知っているのです。神にはその力がある。独り子にはわたしたちへの愛がある。自分の命に固執するのではなく、キリストの命の次に、自分の命を置く時に、命は最も輝く、生かされるのだということのパウロは知っている。ここにキリスト者の強さがあります。「苦しみのなかにあって喜べる」福音信仰の与える不思議な慰めと力が現わされているのです。それこそが十字架にかかれ、わたしたちのために死んでくださった主イエス・キリストのなされた贖いの御業の有難さです。キリストは罪びとのためにみずからの命を置かれた方です。神もそれをわたしたちを愛するがゆえに善しと決断されたのです。ここに愛と恵みを伝え、罪と死の支配を打ち破り、苦難の中においても人を喜びに生かす福音の勝利があります。今、パウロは、キリストの恵みによって働く力を、獄の中にいて周囲に現わしています。わたしたちもこの福音の真理に与って人格と人生と共同体を形作ってゆきたいと願います。

お祈りいたします。